

《2012年10月例会報告》

【日 時】2012年10月31日（水）19:00～20:55（その後「ルン」～0:00頃）

【会 場】筑波大学附属高校 3F 会議室（東京都文京区大塚 1-9-1）

【テーマ】強いフランスを目指したサルコジ時代のフランスサッカー

【演 者】井上俊也（大妻女子大学）

【参加者（会員）18名】阿部博一（日本サッカー史研究会）、井上俊也（大妻女子大学）、牛木素吉郎（ビバ！サッカー研究会）、屋繁男（関大サッカー部後援会）、金子正彦（会社員）、菊地悟（会社員）、小池正通（杉並アヤックス）、崔暢亮（㈱インターリベット）、佐藤真成（サッカー感(観)戦家「蹴球亭」）、白井久明（弁護士）、白髭隆幸（AJPS 会員）、関谷綾子（関谷法律事務所）、田中俊也（三田市整形外科）、田村修一（フットボールアナリスト）、中塚義実（筑波大学附属高校）、松村健一（社会福祉法人勤務）、武藤豊（学生／元 NPO）、森政憲（学校教員）

【参加者（未会員）3名】屋恵子（関大サッカー部後援会）、国島栄市（ビバ！サッカー研究会）、竹内傑（学校教員）

【報告書作成者】中塚亮太

強いフランスを目指した サルコジ時代のフランスサッカー

井上俊也（大妻女子大学）

<目 次>

I. プレゼンテーション：井上俊也

1. 研究の概要・目的
2. 2007年と2012年のフランス大統領選挙の比較
3. プロスポーツが争点となった2012年大統領選挙
オランダーサルコジのプロスポーツに対する考え方の違い
4. サルコジの目指した「強いフランス」
5. サルコジ時代のフランスのサッカークラブの戦績
6. 欧州のビッグクラブとの比較
7. フランスにおけるビッグクラブの期待

II. ディスカッション

1. フランス代表の戦績とレキップ（フランス・フットボール）誌の顛末
2. 「クォータ制」の背景ーフランス代表と国籍問題
3. フランスにおける「育成」と「移民」の問題
4. フランスにおける「みるスポーツ」環境とEURO2016の見通し
5. 税金をめぐる
6. その他

I. プレゼンテーション：井上俊也

1. 研究の概要・目的

今日の話にはミッシェル・プラティニもジネディーヌ・ジダンも出てきません。ニコラ・サルコジとフランソワ・オランドという、前職と現職の二人の大統領が出てきます。日本も政治の季節になっていると思いますが、今年は24年ぶりに世界の二大大統領選挙といわれるアメリカとフランスの両方で大統領選挙が行われた、非常に珍しい年でもあります。その大統領選挙をめぐって、いろいろとスポーツ絡みで動きがあることに私も初めて気が付きまして、今年の5月に選挙があったんですけど、それ以降いろいろ追っかけて今日発表するに至りました。

私は1989年から1994年までちょうど5年間フランスに住んでおりまして、ちょうど私が行っていた学校がフランス代表の合宿所だったんですね。日本で言ったら東大の検見川の世界だったんです。Jヴィレッジのモデルとなったクレールフォンテーヌというフランスの優秀な育成機関があるんですけど、それができるまで、私の通っていた学校の近くにフランス代表が合宿に来ていました。フランスはクレールフォンテーヌを作ってから、ワールドカップと欧州選手権の予選で3回連続で予選落ちしてるんですよ。それから、クレールフォンテーヌができてからワールドユースに一回も出てなかった。95年の大会に、日本が79年に地元開催以来、16年ぶりに出た時に、フランスは77年のチュニジア大会以来18年ぶりに出るんで、意外とフランスの育成って大したことないんですよ。

田村：アンリが出た時ですよ。マレーシアの。あれは97年です。俊輔とかが出た。日本が久しぶりに出たのはその前の95年で、ヒデとか松田とか奥大介とかが出たときですね。元々はナイジェリアで行われるはずだったのが、ナイジェリアが政情不安定でカタールで行われることになった大会です。

2. 2007年と2012年のフランス大統領選挙の比較

いきなり削ってもらいましたが…。

まずフランス大統領選挙ということで、フランスでは1958年にシャルル・ドゴールという人が第5共和制を敷きまして、それ以降大統領選挙を行っています。任期は、昔は7年だったんですけど、今は5年になっています。2002年までは7年間大統領になるということで、世界の先進国には珍しく、長期の政権がもたらえる大統領でした。2012年は10回目の選挙ということです。フランスの大統領選挙では、過半数を取らないと大統領になれません。今まで一発で過半数を取った大統領は誰もいません。ということは、過去10回の選挙では、今まで必ず決選投票が行われて大統領が決まっていた。

2回を除き、保守(青字)と革新(赤字・斜字)の保革対決		
	当選	次点
1965年	ドゴール	ミッテラン
1969年	ポンピドー	ポエール
1974年	ジスカールデスタン	ミッテラン
1981年	ミッテラン	ジスカールデスタン
1988年	ミッテラン	シラク
1995年	シラク	ジョスパン
2002年	シラク	ルペン
2007年	サルコジ	ロワイヤル
2012年	オランド	サルコジ

フランス大統領選挙の歴史ということで、1965年から2012年までの当選者と次点という形で、皆様もご存じの政治家の名前が並んでいるんですけど、ドゴール、ジョルジュ・ポンピドー、バレー・ジスカルデスタン、フランソワ・ミッテラン、ジャック・シラク、サルコジ、オランドと、日本の大体10年間分の首相の数が、フランスの50~60年間分の大統領の数というわけです。

今までのフランス大統領選挙がどうだったかという、例外的なことが2回だけありました。それ以外はすべて青対赤。青が保守、赤が革新ですね。今まで社会党政権、というか左翼の大統領はミッテランとオランドだけです。あとは保守政権です。例外として、アラン・ポエールというのは、保守対保守で戦ったことが一回だけあるんですけど、これはドゴール政権が末期だった時の第2大統領というくらいで、それ以外はほとんど赤対青。2002年の、ちょうど日本でワールドカップをやる直前だったんですけど、ジャン・マリー・ルペンっていうのがいまして、これ青にするのはちょっと迷ったんですけど、いわゆる極右ですね。移民を排斥しようという形で、なぜかこのとき社会党のリオネル・ジョスパンが負けてしまったんですね。日本も政党としてはいろいろな政党があるんですけど、保革の二大政党で戦ってきているという形です。

ここでなんですけど、2007年の選挙というのが非常に注目を集めました。2007年はサルコジとセゴレーヌ・ロワイヤルという女性の戦いでして、このときすごく投票率が高くて83.77%と、世界の先進国でもこんな高い数値はありません。普通は大体70%台ですね。なんでこの5年前の大統領選挙が高投票率となったかという、2005年くらいからフランスの課題が顕在化してきたということが理由として挙げられます。皆さんもテレビでご覧になったことがあるかもしれませんが、移民の若者が郊外で暴動を起こしたり、パリ・サンジェルマンとハポエル・テルアビブの試合でユダヤ人のサポーターが警官に殺されたりといった恐ろしい事件がありました。あと若者の失業率が高くなっています。30歳以下の失業率が25%くらいですね。それから、あれだけEUの中心になってきたフランスが憲法批准に対して否決をしたのが2005年でした。それからEUの加盟国が増えてきたという問題があります。これはどういう問題かという、こういうところからの移民がフランス人の仕事を奪っていくということです。それから、週35時間制というのは、失業率を低くするために週35時間しか働けなくすることです。ワークシェアリングでたくさんの人が働けるようにしたということをやりました。ところが35時間しか働けないということで競争力がなくなるわけです。本当はフル出場してほしい選手に70分であがってくれよという感じでやっちゃって、70分から出てきたやつが全然だめだったというように限界ができてきて、深刻な問題となっているというわけです。それから、フランスの企業がどんどん国外に移転している。今の日本と似ているんですけど、税金や社会保険の費用が、EUの中でもフランスは高いということで企業が国外に行ってしまう。ということで経済ボロボロ、若者は怒りまくる、失業率は高く、荒れる国になってしまったということなんです。それまでシラクさんという相撲の好きなおじいちゃんが二期12年やっちゃって、シラク自身が悪いというわけではないと思うのですが、さすがに社会の動きに対してニューリーダーがほしい、というわけで期待を集めているということです。日本も今ニューリーダーを求めているのかもしれませんが、80歳のおじいちゃんが東京都知事を今日辞めてしまうというわけです。

先ほども言いましたが、2007年の選挙には2人の候補が出ました。まず一人目が女性のロワイヤル候補。社会党での経歴もそれほどなかったのですが、女性ということで非常に党内投票で人気があり、そういう人が出てきたことで社会党としての人気も出てきて、シラクに対して勝つんじゃないかと言われていました。対抗はサルコジです。サルコジは5年前はどういう評価だったかという、内務大臣、日本で言うところの自治大臣ですけども、治安の回復にすごく実績を残したんです。いわゆる移民をどんどん排斥する、それから郊外で暴れる若者をどんどん縛り上げていくことをやって、暴動の收拾に一応の貢献はしました。それが正しい政策だったのかどうかはわかりませんが、この暴動を治めることができたのはニコラ・サルコジのおかげだったと、政治的にいろいろな意見があるかもしれませんが、これはもう事実です。かなり豪腕なことをやりました。

というわけで、荒れたフランスに対して、女性のロワイヤルさんと鬼の体育教官みたいなサルコジが戦いました。2人の政策は大きく変わっていて、ロワイヤルの方は社会党ですから、労働者の雇用政策をどんどんやったわけですね。日本の民主党を見てもらえればわかります。労働環境の改善とか、労働賃金の引き上げとか、週35時間制の堅持とか若者の雇用の改善とか、はっきり言って相当金がかかります。そして移民に対しても排斥するのではなく仲良くしようということをやりました。片やサルコジの方は、経営者側の雇用

セゴレーヌ・ロワイヤル候補	ニコラ・サルコジ候補
社会党内での要職・実績なし 新しい女性の候補 →党内投票で圧倒的な支持	内務大臣として 治安の改善に実績 暴動の収拾に貢献
	

政策ということで自由競争を主張し、国際競争力を高めるということをやりました。週35時間制は働かないとだめだと。走れるやつは90分走れ、120分走れということですね、35時間制をやめようと、企業が国外にいなくなっちゃうんじゃなくて、国内にいてもらおうということをするわけです。前半終わったところで交代しますなんていうサッカーチームじゃなくて、90分できるやつにはやってもらってハットトリックでも狙ってもらおうというチームにしてこうということをして、それから移民政策でも入国管理などを厳しくしたということです。結果は、意外と差がついてサルコジが勝ったわけです。サルコジが勝って、大統領を5年間務めました。

サッカーファンの皆さんは覚えているかもしれませんが、この選挙戦のときに一人のサッカー選手が登場しました。ジダンでもプラティニでもありません。このときに出てきたのはリリアン・テュラムです。1998年のワールドカップで背番号15、準決勝のクロアチア戦で2点を取りました。代表で100試合ほど出て2ゴールしか決めていませんが、それがたまたまクロアチア戦だったという人です。素晴らしいディフェンダーですね。ユベントスでも活躍しました。彼はカリブ海のグアドループ出身の選手です。テュラムがどうしたかというところでですね、暴動の時に当時の内務大臣のサルコジに面会を要求したんですね。移民に対してクズだ、ボケだ、カスだと言っているサルコジに対して、テュラムは敢然として怒ったわけです。俺は移民だと。そして若者や移民の不満の原点は、社会を不平等にしているお前らが悪いんじゃないかと、たかがサッカー選手が内務大臣のサルコジに詰め寄ったというわけです。これは日本でも結構大きなニュースになりました。彼は、当時フランス代表を辞めた後だったと思うんですけど、不法滞在でサルコジから住居を追い出された人間を、テュラム・シートといって代表の試合に招待するということをやりました。そんなことをやって、彼は大統領選挙の時にサルコジの主張は人種差別につながると不支持を表明しました。彼のこの動きによって、このときのサッカー界は結構アンチ・サルコジだったというわけです。ここまで話をすると、フランスは1998年のワールドカップの時に優勝したんですけど、そのときはジダンをはじめとして過半数の選手が白人以外の選手でした。このときはじめてフランスの赤・白・青ではなく、黒と白とアラブの三色が融和したといわれたんですけども、そういうことに対して、人種差別的なことをやっているというようなイメージをサルコジは持たれている。日本でもそういうイメージを持っている人は多いんじゃないかと思います。こんな風にサッカー界は反対しましたが、一応サルコジは当選しまして、5年間彼は大統領の職を務めました。それで、経済優先でもっと働き、もっと稼ごうという形で競争原理を導入し、強い者、富める者優先の政策を取りました。いわゆる大企業優先という言い方かもしれません。強い人間にはそれなりにちゃんと報いるべきだ、ということをやった彼は徹底させたんですね。

ところが、残念なことにリーマンショックがありまして、誰が大統領でもそうなったと思いますが、失業率が非常に高くなりました。さらに昨今の頃、ユーロの危機がありまして、彼は非常に力を入れるべきところで運が悪く、リーマンショックやユーロ危機という形で、辛い最後の年を過ごしました。とはいっても選挙は、「近いうちに」ではなく5年経ったら来るわけですね。2012年の大統領選挙の争点は、移民政策から経済政策に変わって、リーマンショックと欧州金融危機への対処はどうなっているのかということが争われました。フランスとドイツは、一生懸命ギリシャやイタリアやポルトガルを助けるということをやっているわけですが、それに対する国民の反対も少なくはありません。また富める者、強い者中心の政策というのには、国民からの不満もあります。サルコジになったおかげで失業したという人はたくさんいます。得をした人もたくさんいるけど、損をした人もたくさんいるということです。こういうわけで、経済政策は2012年の大統領選挙の争点となりました。

そこで2人ファイナリストが出ました。まず、挑戦者は社会党のオランダです。この人は5年前のロワイヤルとは対照的に、社会党の中核を歩んでいる人間で、ようやくこいつが出てきたかという人間です。ちなみにロワイヤルとはかつてパートナー関係にあり、籍は入れてなかったと思いますが同棲していました。日本の感覚からいくと信じられないですね。サルコジはディフェンダーという形で彼と戦うということになりました。このときの状況が状況なので、オランダが勝つだろうといわれていました。

フランソワ・オランダは「今こそ変革の時」ということで、社会保障を優先する政策を掲げました。そして財源を富裕層への増税ということで、年収で100万ユーロ(1億円)を超える部分には所得税75%と、とんでもないことをやりました。移行措置ということで猶予期間はあるんですけど、そういう法案が通りました。片やニコラ・サルコジは「強いフランス」といって、緊縮財政政策を掲げました。緊縮財政をしていくことで財政再建していく、ユーロの防衛をしていくと。基本的に彼は既定路線をやっていくしかないということなんです。

その選挙戦の中で、なんと高額所得者のスポーツ選手への課税と、外国資本の参入などプロスポーツが大統領選挙での争点となりました。5年前と10年前の大統領選挙も調べたんですけど、たぶん今回初めてこういうことが話題になったと思います。

発表者補足：75%ルールは2012年の所得から適応されますが、所得税は次年度に支払うことになり、2012年分の所得税の実際の納税行為は2013年になりますので、新聞記事には「次年度予算」となっているものもあります。所得税率の引き上げ(年収100万ユーロ超に75%)は、オランダ新政権発足後も議論はあったのですが、9月に閣議決定、10月19日に国会で法案が可決されました。サロンは10月31日に行われたので、当方の発言となりました。

この実施ですが、2012年の所得と2013年の所得が対象となります。(2年間暫定的、ということでした)フランスの税務年度は日本と同じで1月に始まり12月に終わるのですが、2012年の所得に対する所得税は2013年に支払うことになり、75%ルールは実際には現在(2012年)の所得に対して来年(2013年)払うことになります。(毎月の所得から天引きされていても、来年2月から3月にかけて行われる確定申告で追加納税となります。年末調整という制度は日本独自で、フランスではほぼ全員が確定申告を行います)

なお、当方の発言、あるいは多くのマスコミで、「100万ユーロ以上に75%の税率」としてありますが、正確には「100万ユーロを超える部分について75%」です。(5,964ユーロまでは税率ゼロ、5,964ユーロから11,896ユーロは5.5%、11,896ユーロから26,420ユーロは14%、26,420ユーロから70,830ユーロは30%、70,830ユーロから15万ユーロまでは41%、15万ユーロから100万ユーロまでは45%、100万ユーロ以上は75%です)

それから、日本では富裕税と報じられているものもありますが、税務の世界において富裕税というのは「資産など所有しているものに対する税金：固定資産税など」で、今回のフランスの税制改革

は「富裕層に対する所得税」です。

3. プロスポーツが争点となった 2012 年大統領選挙 オランドーサルコジのプロスポーツに対する考え方の違い

そうした中でオランドが、「フランスのプロサッカー選手の給料は適正か？もらいすぎじゃないか？」という問題発言をしました。こき下ろされたのは、選手ではなくパリ・サンジェルマンの監督のカルロ・アンチェロッティです。アンチェロッティは年俸6億円もらっていますが、たかが一フランス人が、カルチョの国イタリアから来られた大監督に、それは高いじゃないかということを行いました。

パリ・サンジェルマンは1億円以上のサラリーをもらっている選手が22人います。フランスで一番多いです。たぶんマンチェスター・ユナイテッドとかああいうところは、ほとんどみんな1億円もらっていると思うんですけど、それが22人というのはフランスではかなり多いですね。

この発言がまた大論争になったんですね。大統領候補に監督の年俸が高いなんて言われるのはとんでもないということで話題になって、大論争になりました。オランドは、サッカーとは関係ないんですけど、F1なんかの金持ちのスポーツをやめて、エコなことをやろうというような発言も不用意にしてみました。

このようなことが大論争になりまして、5月6日に投票がありましたけど、その10日ほど前、選挙戦終盤にオランドとサルコジそれぞれがレキップというフランスを代表するスポーツ新聞社を訪問し、2時間インタビューを受けました。そしてそのインタビュー記事を、2面使って報道しました。



田村：あとで話しますけど、それでフランス・フットボールの編集長の首が飛んでるんですね。

日本で言ったら、衆議院選挙の2~3週間前に、安倍晋三さんと野田佳彦さんと橋下徹さんと石原慎太郎さんがスポーツ報知に行って記者会見をやるというようなことで、考えられないことです。これは読売新聞や日本経済新聞でもあり得ないと思います。選挙戦の終盤というのは、基本的に選挙の常識から言って、普通は女性票を取りたいんですね。男しか読まないような新聞にこのこ出てくってというのは非常に珍しいことです。

4月27日金曜日の新聞の一面がこれですね。ここ（上部分）にオランドがきています。28日にはサルコジがここにきています。大きな写真が何かといいますと、28日の土曜日は、フラ



ンスカップの決勝の日でありました。リヨンと、クビリーという4部相当のチームが初めて決勝に上がってきました。フランスカップの決勝の日なので、サルコジはこの日の夜この試合を見に行ったわけです。

で、新聞記事としてはこんな感じですね。27日の新聞ではこうやって2面分とって、1/2と書いてあるんですけど、ここでオランダが話をしています。

翌日はサルコジが来て、サルコジがこういった形でインタビューを受けているということです。

どんなことを彼らが言っていたのかというと、初日にオランダが行って翌日にサルコジが行ったということで、オランダの言ったことに対してサルコジがことごとく反対のことを言っているんですね。

まず、スポーツでも強い人に対する規制をし、ある程度の平等を確保しなければならないというのがオランダの意見です。サルコジは、スポーツというのは平等とは対極にあるものであり、力の強い者が勝つものなのだといい言っています。オランダは、スポーツ選手に限らず、高額所得者のトップ選手に対して課税しますと言っています。サルコジは、トップ選手は成功の証であり、ビジネスマンでもスポーツ選手でもその努力は認めなくてはならないと言っています。また、アルジャジーラがフランスのサッカーの放映権を入札で獲得しました。それまではカナル・プリュスというフランスの契約型テレビ局が放映権を持っていたのですが、それをアラブのテレビ局が買い取ったわけです。これに対してオランダは、これを規制しなくてはならないと言いました。フランスでは、映画の何割はフランス映画を上映しなくてはならないというルールがあり、フランスは自国の文化を保護し、他の文化を規制しようという動きがあります。オランダは、アルジャジーラの放映権獲得についても、従来の文化や映画と同様に規制しなくてはならないと言ったわけです。サルコジは違いました。アルジャジーラが高い金で放映権料を出してくれれば、フランスのサッカー界が潤うじゃないかと、そういう割り切り方ですね。それと、パリ・サンジェルマンが去年からカタールの資本になったわけですけども、パリ・サンジェルマンに対してカタールがあれだけ金を出してくれているから、アンチェロッチェにも6億円払えるんだと言っていました。

それから、クォータ制ということに関してなんですけど、育成の話の中でこれも去年か一昨年に話題になりました。クォータというのは、比率、割合のことです。U-18とかU-15といったアンダーエイジでチームを作って鍛えても、その人たちが皆オーバーエイジになった時に、アルジェリア代表になってしまったり、カメルーン代表になってしまったりということがかなりあるということで、いわゆる外国代表になる可能性のある選手の割合を一定率以下にしようということです。フランス協会の中で検討されていたものです。せっかく育成してもオーバーエイジになったら取られてしまう、という観点で検討されていましたが、これはすなわち白人以外の選手の割合が一定以下になるということで、人種差別的であると報道されていました。ジダンの話になりますが、ジダンの両親はアルジェリア人ですが、フランス代表として活躍しました。ジダンというのは少し変わった選手で、ジダンの世代で両親がアルジェリア人でフランス代表になったのはジダンしかいないんです。アルジェリア戦争でフランスに占領されていたときは別なんですけど、ジダンの同世代で、フランスのアンダーエイジで代表だった選手は、ジダン以外皆アルジェリア代表になっています。ジダンだけがフランス代表になったんですね。これは何でかということ、ジダンの両親は非常にフランスをリスペクトしていて、フランス流に彼を育てたんですね。たとえば、テレビを見ていいのは土曜日の夜だけ、つまり翌日学校



のない日だけテレビを見ていいよと。そうするとジダンは何を見たかという、サッカーを見ていました。彼はサッカー以外テレビを見られなかったとインタビューで答えたことがあるんですけど、子どもの時サッカーしか見ていなかったというわけです。だから、ジダンのケースは極めてまれなんです。ほとんどの選手はアルジェリア代表になり、モロッコ代表になり、カメルーン代表になり、という形で選ばれていくんですね。オランダはこれについて、フランスで育成した選手の国外流出に歯止めをかけるべきと言い、クォータ制に賛成の立場をとりました。一方サルコジは、優れた選手の国外流出はやむを得ないと、優れた国内クラブがないから仕方がないんじゃないかということで、クォータ制に反対の立場をとりました。この時期にチェルシーのディディエ・ドログバが一つの例として話題になっていました。彼はアンダーエイジはずっとフランスで過ごしていたんだけど、コートジボワール代表になっています。コートジボワール代表になったり、チェルシーに行ってしまうりするんじゃないかと、国内にとどめてチームを作るべきだと。そのためにはこういうのが必要だと。このように後攻のサルコジの方がオランダを全部否定して有利だというような感じでした。しかし、結果としてはサルコジは負けてしまい、オランダが勝ったということです。

4. サルコジの目指した「強いフランス」

サルコジ時代のフランスサッカーということで、2007年から2012年という5年間だったんですけど、どうだったのかということを見ていきます。今年のオリンピックのときも言われたんですけど、国がいろいろ支援すればスポーツは強くなるという話なんですけど、サッカーの場合は長いプロスポーツの歴史を持っています。ですから、多少国が力を入れたところでそんなに強くなるということとはたぶんないと思います。もちろんそれで苦労されている方がいることもわかっていますが、ちょっと国がお金を出して支援したからといって急に強くなるようなスポーツではありませんし、しかもフランスのレベルですとなかなかそうはならないです。クラブチームの場合、逆にいえば、金銭で他のクラブから選手を獲得・強化することが可能なので、やれるということです。

まず、サルコジ時代のフランス代表についてですが、この5年間で2回の国際大会がありました。2008年の欧州選手権と2010年のワールドカップです。結果は、2008年の欧州選手権では、組み合わせがちょっと悪かったと思いますけど、ルーマニアに引き分け、イタリア、オランダに負け。それから2010年のワールドカップでは、ウルグアイ、メキシコ、南アフリカという結構楽勝なグループに入ったにもかかわらず、結果はご存じのとおりであります（ウルグアイに0-0、メキシコに0-2、南アフリカに1-2）。歴代のフランス大統領で、国際大会で1勝もしていないのはサルコジだけです。もうひとつ面白い話をしますと、これだけ短命といわれている日本の首相ですけど、アジアカップでもワールドカップでも1勝もしていない総理大臣というのは一人もいません。これは調べて結構驚きました。ちなみに日本の場合はアジアカップにもワールドカップにも出ていないという総理大臣がやたら多いです。というわけで、サルコジ時代のフランス代表というのは結構ガタガタだったというわけです。

サルコジ時代のフランス代表 (2007年5月16日から2012年5月14日)	
在任中の欧州選手権、ワールドカップの本大会で未勝利 (歴代の大統領で未勝利はサルコジだけ)	
2008年欧州選手権	2010年ワールドカップ
△0-0 ルーマニア	△0-0 ウルグアイ
●1-4 オランダ	●0-2 メキシコ
●0-2 イタリア	●1-2 南アフリカ

5. サルコジ時代のフランスのサッカークラブの戦績

フランスリーグやフランスカップ、リーグカップといった大会で優勝、あるいは上位の成績を収めると、チャンピオンズリーグとか UEFA カップ、あるいはインタートトといった欧州のカップ戦に出場することができますが、サルコジが大統領だった時のフランスサッカーが欧州のカップ戦でどのようであったかを見ていきます。

2006年のリーグで上位だったリヨン、マルセイユ、トゥールーズ、レンヌ、ランスがどうなったかということ、リヨンはチャンピオンズリーグでベスト16、マルセイユはUEFA カップベスト16、他はグループリーグや予選で敗退といった感じでした。このように5年間展開していきますが、

最近のものは2011-12シーズンの欧州カップでのフランス勢ということで、チャンピオンズリーグはチェルシーの優勝で終わりましたが、マルセイユがベスト8、リヨンがベスト16まで行きました。あとのクラブはチャンピオンズリーグでもヨーロッパリーグでグループリーグ敗退ということで、年を越してサッカーを見れたのは、結局マルセイユとリヨンだけということになります。ということで、割と低調です。

23	
5-3-2. 2007-08シーズンの欧州カップでのフランス勢	
フランスリーグ	
1位 リヨン	→チャンピオンズリーグベスト16
2位 マルセイユ	→UEFAカップベスト16
3位 トゥールーズ	→UEFAカップグループリーグ敗退
4位 レンヌ	→UEFAカップグループリーグ敗退
5位 ランス	→UEFAカップ予備戦敗退
フランスカップ	
優勝 ソショー	→UEFAカップ1回戦敗退
リーグカップ	
優勝 ボルドー	→UEFAカップベスト32

25	
5-3-4. 2008-09シーズンの欧州カップでのフランス勢	
フランスリーグ	
1位 リヨン	→チャンピオンズリーグベスト16
2位 ボルドー	→UEFAカップベスト32
3位 マルセイユ	→UEFAカップベスト8
4位 ナンシー	→UEFAカップグループリーグ敗退
5位 サンテチエンヌ	→UEFAカップベスト16
6位 レンヌ	→UEFAカップ1回戦敗退
フランスカップ	
優勝 リヨン	→チャンピオンズベスト16
リーグカップ	
優勝 パリサンジェルマン	→UEFAカップベスト8

27	
5-3-6. 2009-10シーズンの欧州カップでのフランス勢	
フランスリーグ	
1位 ボルドー	→チャンピオンズリーグベスト8
2位 マルセイユ	→ヨーロッパリーグベスト16
3位 リヨン	→チャンピオンズリーグベスト4
4位 トゥールーズ	→ヨーロッパリーググループリーグ敗退
5位 リール	→ヨーロッパリーグベスト16
フランスカップ	
優勝 キャンガン	→ヨーロッパリーグプレーオフ敗退
リーグカップ	
優勝 ボルドー	→チャンピオンズベスト8

29	
5-3-8. 2010-11シーズンの欧州カップでのフランス勢	
フランスリーグ	
1位 マルセイユ	→チャンピオンズリーグベスト16
2位 リヨン	→チャンピオンズリーグベスト16
3位 オセール	→チャンピオンズリーググループリーグ敗退
4位 リール	→ヨーロッパリーグベスト32
5位 モンペリエ	→ヨーロッパリーグ予備戦敗退
フランスカップ	
優勝 パリサンジェルマン	→ヨーロッパリーグベスト16
リーグカップ	
優勝 マルセイユ	→チャンピオンズリーグベスト16

31	
5-3-10. 2011-12シーズンの欧州カップでのフランス勢	
フランスリーグ	
1位 リール	→チャンピオンズリーググループリーグ敗退
2位 マルセイユ	→チャンピオンズリーグベスト8
3位 リヨン	→チャンピオンズリーグベスト16
4位 パリサンジェルマン	→ヨーロッパリーググループリーグ敗退
5位 ソショー	→ヨーロッパリーグプレーオフ敗退
6位 レンヌ	→ヨーロッパリーググループリーグ敗退
フランスカップ	
優勝 リール	→チャンピオンズリーググループリーグ敗退
リーグカップ	
優勝 マルセイユ	→チャンピオンズリーグベスト8

サルコジ時代のチャンピオンズリーグでベスト8まで行っているチームは3チームしかないんです。2009-10 シーズンにベスト16でリアルに勝って、ベスト4まで行ったリヨンと、同じ年ベスト8でリヨンとぶつかったボルドーと、2011-12 シーズンのマルセイユの3チームです。というわけで、5年間やって3回しかベスト

8に行っていないということです。それから、ヨーロッパリーグは、かなりステータスが低いタイトルになってしまいましたけど、ベスト4以上はないです。

その前のシラクの時の5年間はどうかだったかという、モナコが準優勝しています。これは、デシャンが監督をやっていた時ですね。それから、リヨンが3年連続でベスト8に入っています。それから、

2003-04 シーズンのUEFA カップではマルセイユが準優勝しています。ドログバがいたときで、決勝でラツィオに敗れました。2回目の準優勝ですね。1回目はモスクワでパルマに負けたときですね。この前の、1990年代のフランスのサッカーは、クラブレベルでは結構強かったときがありまして、UEFA のリーグ別のランキングで、最高で2位まで行っていました。今はどうなっているかという、シ

ラク時代はずっと4位と5位の間でした。よくヨーロッパ5大リーグといわれたときに入るか入らないかというのがフランスリーグの力だったんですけど、今は6番目に落ちてしまっています。

表にしたのが過去10年間のチャンピオンズリーグでのフランス勢ということで、最初の5年間がシラクの時代、あとの5年間がサルコジの時代というようになっています。これを見ると、ちょっと右肩下がりの状況なのかな、ということです。

同様に、ヨーロッパリーグの方なんですけど、昔はマルセイユが準優勝したり、上位に入っていた

5-4-1. 過去10シーズンのチャンピオンズリーグにおけるフランス勢

	2002-03	2003-04	2004-05	2005-06	2006-07	2007-08	2008-09	2009-10	2010-11	2011-12
優勝										
準優勝		セゾ								
ベスト4								リヨン		
ベスト8		リヨン	リヨン	リヨン				ボルドー		マルセイユ
ベスト16			セゾ		リール リヨン	リヨン	リヨン		リヨン マルセイユ	リヨン
グループ1位 グループ2位 グループ3位		マルセイユ		リール	ボルドー	マルセイユ	ボルドー マルセイユ	マルセイユ		
グループ1位			パリサンジェルマン						オセー	リール
予選通過				セゾ		トールーズ				

5-4-2. 過去10シーズンのヨーロッパリーグにおけるフランス勢

	2002-03	2003-04	2004-05	2005-06	2006-07	2007-08	2008-09	2009-10	2010-11	2011-12
優勝										
準優勝		マルセイユ								
ベスト4										
ベスト8		ボルドー	オセー				マルセイユ パリサンジェルマン			
ベスト16	オセー	オセー	リール	ユヴェントス リール マルセイユ	パリサンジェルマン リール コッス	マルセイユ	リヨン	マルセイユ リール	パリサンジェルマン	
ベスト32	パリサンジェルマン リール コッス	コッス	コッス	コッス セゾ	ボルドー リール	ボルドー	ボルドー		リール	
グループ1位								トールーズ	トールーズ	パリサンジェルマン
グループ2位					オセー		オセー			リール
グループ3位				リール		トールーズ リール				
予選通過	リオン	コッス	トールーズ	オセー	マルセイユ	コッス	リール	リヨン	リール	コッス

ですから、あながちフランスにビッグクラブがないというわけではないということです。

ビッグクラブと言いますと、どうしてもマンチェスター・ユナイテッドとか、レアル・マドリードとか、アーセナルとか、そういったところを思い浮かべますが、それに比べると差はついているのかなといった感じです。実際、2007年ころと比べて1位と10何位の差っていうのは広がっています。つまり、どんどんマンチェスター・ユナイテッドがビッグクラブになっていく一方で、リヨンとかのあたりのクラブは毎年増えたり減ったりで、格差は広がっているというわけです。経済原理からいって、だんだん格差が生まれてくるというのはやむを得ない話かなという風に思っております。

そこで、2012年のところを見ていきますと、2012年の上位8チームは、6年連続トップ10入りなんです。いわゆる常連なんです。どういうクラブがあるかと言いますと、イングランドのマンチェスター・ユナイテッド、アーセナル、チェルシー、スペインのレアル・マドリードとバルセロナ、イタリアのACミランとユベントス、それからドイツのバイエルン・ミュンヘンという8チームです。というわけで、この8チームは6年連続でトップ10に入っている、常連のクラブになります。

さらにいうと、上位20チームについても、17チームは6年連続ランキング入りしています。イングランドは、先ほどの3つのクラブに加えてリバプール、トッテナム・ホットスパー、マンチェスター・シティ。スペインは同じですね。イタリアは、インテル・ミラノが入ってきます。ドイツはバイエルンに加えて、シャルケ、ボルシア・ドルトムント、ハンブルガーSVが入っています。フランスはリヨンとマルセイユの2チームということで、一応こういうトップ20くらいのクラブの中に、リヨンとマルセイユは入っているということなんです。

でもやっぱり、マンチェスター・ユナイテッドとは差があるよね、と皆さん思われると思うんですけど、直近のチャンピオンズリーグで、いわゆる常連さんがどういう状況だったのかをお話しをしたいと思います。

先ほどの表で、フランスから出て残った2チームは、マルセイユがベスト8、リヨンがベスト16でした。結局どうなったのかと言いますと、チェルシーが優勝しました。準優勝はバイエルン・ミュンヘンです。ベスト4はスペイン勢が2つで、レアル・マドリードとバルセロナ、ベスト8にはACミラン、ベスト16で終わったのがインテル・ミラノ、グループステージで負けてしまったのがマンチェスター・ユナイテッドという形です。先ほど言った、6年連続トップ10入りしたチームを赤字で書いています。ここには7チームしか出ていないんですが、1チームどうなっていたかという

42

**6-3. 2011-12チャンピオンズリーグでのビッグクラブの戦績
(6年連続トップ10入り)**

	フランス勢	その他の主要クラブ
優勝		チェルシー
準優勝		バイエルン・ミュンヘン
ベスト4		レアル・マドリード バルセロナ
ベスト8	マルセイユ	ACミラン
ベスト16	リヨン	チネリ インテル・ミラノ ア・セビリ マンチェスター・シティ マンチェスター・ユナイテッド バルンシア
グループ3位		ドルトムント
グループ4位		
予備総敗退		

ヨーロッパリーグ出場

ASローマ
バルンシア
トッテナム・ホットスパー
シャルケ04

ヨーロッパカップ不出場

ユベントス
ハンブルガーSV
リバプール

いうと、ユベントスはヨーロッパカップに出ていませんでした。あと、黒字で書いてあるチームは、ベスト20に入っている17チームです。6年間連続してランキング入りしているチームは黒字で書いています。こう考えると、マルセイユもリヨンも、赤字の大体真ん中くらいまで行ってるから大健闘しているということなんです。ウイニング・イレブンのように、金があるから強いチームが作れるというのは誰もが思っていることなんですけど、それほどお金を稼いでいないクラブがここまで来たのは大健闘と言えんじゃないかなという風に思います。

サルコジ時代のフランスサッカーを振り返ってみると、まず代表チームは、先ほども申しました通り、2008年の欧州選手権と2010年のワールドカップで惨敗。特に2010年のワールドカップではチームの内紛があって、ナショナル・イメージをダウンさせてしまった。今回も同じことが起きたのでお

家芸みたいになってしまっていますが、イメージをかなりダウンさせてしまったというのがこの代表チームです。クラブチームの方ですけど、チャンピオンズリーグではベスト 8 止まりなんです。1990年代に上位常連がいたときに比べると、かなり凋落しているなどいえると思います。2002年から2007年くらいのシラクの第2期と比べても、劣っているなど。リーグランキングも落としてきて6位となっています。リーグランキングを落とすとどうなるかというと、チャンピオンズリーグに出るチームの数が減っていったり、出ることができても予備選から戦わなくてはならなくなったりということで、かなり不利になっています。その中において、リヨンとマルセイユは大健闘しているんじゃないかという風に言えると思います。なんでビッグクラブでなくてはいけないかと言いますと、国内リーグを戦って、水曜日になったらチャンピオンズリーグを戦うという風になってきますと、ファーガソンのやっているターンオーバー制じゃありませんけど、2チーム作れないと勝てないということになります。なので、今はビッグクラブでないと、ヨーロッパのトップのところへは行けなくなっていると思います。が、大健闘であると思います。

7. フランスにおけるビッグクラブの期待

国内に、ビッグクラブの待望論というのはあります。今年の春のチャンピオンズリーグのベスト 4 は、チェルシーとバイエルン・ミュンヘンとレアル・マドリードとバルセロナということで、トップ 10 の常連クラブが上位に来ているので、トップ 10 の常連となるようなビッグクラブを作してほしいというのが、ファンとしては思うわけです。それと、有力選手も国外に流出します。例えば、今年流出してしまった選手は、ベルギー人なんですけど、リールにいたエデン・アザールという選手がチェルシーへ、それからモンペリエにいたオリヴィエ・ジルーがアーセナルにいったというように、有望選手が国外に流出してしまっているわけです。それで、今回オランダが勝ってしまったことで、新税制がそれを加速させるんじゃないかということが考えられます。国内のビッグクラブでそういう有力選手を引き留める力を持っているのが、今まではなかったということですね。

ここで、フランス代表の国際大会における所属リーグの推移というのを見てみました。フランス代表が予選をちゃんと勝ち抜くようになったのは1996年からです。奇しくも、日本がオリンピックに出始めた時と同じなんです。予選免除のときもありますけど、96年の欧州選手権から、フランスは2年ごとに必ず欧州選手権とワールドカップに出ていまして、ベスト4だったり、優勝したり、グループリーグ敗退だったりという風になっています。選手の数は22人か23人なんですけど、フランス

リーグの選手が何人いたかと言いますと、96年には22人中18人がフランスリーグの選手でした。だんだんこれは減ってきて、98年のワールドカップでは10人になりました。日本に来られなかった2002年のワールドカップでは、さらに5人まで減りました。当時多かったのはイタリアなんですけど、最

7-1. フランス代表選手の国際大会における所属クラブの推移

大会名	成績	フランス	イタリア	イングランド	スペイン	ドイツ	その他
1992 欧州選手権	グループリーグ敗退	18	1	1	0	0	0
1996 欧州選手権	ベスト4	18	4	0	0	0	0
1998 ワールドカップ	優勝	10	8	8	1	1	0
2000 欧州選手権	優勝	8	4	8	2	2	0
2002 ワールドカップ	グループリーグ敗退	6	4	8	3	2	0
2004 欧州選手権	ベスト8	8	8	8	1	2	0
2006 ワールドカップ	準優勝	11	8	7	1	1	0
2008 欧州選手権	グループリーグ敗退	10	2	8	8	2	0
2010 ワールドカップ	グループリーグ敗退	11	0	7	8	1	1
2012 欧州選手権	ベスト8	12	1	7	2	1	0

近はイングランドが多くなっています。今また、2006年のワールドカップあたりからフランスリーグの選手が増えてきています。逆に言うと、フランス人でいい選手があまりいなくなったということの裏返しでもあるんですね。フランス人でいい選手がいれば、プレミアや、セリエAや、リーガ・エスパニョーラに行くんですけど、それがなくなったというわけです。2012年の欧州選手権では久しぶりに過半数ですね。23人の登録選手中12人がフランスリーグに所属しています。過去何大会か見てもらってますけど、「その他」が一回だけあります。「その他」が一回ありますけど、あとはフランス、イタリア、イングランド、スペイン、ドイツと、いわゆるヨーロッパの5大リーグから必ず出てくるということになってます。「その他」はギリシャリーグのパナシナイコスに所属していたジブリル・シセが例外です。あとは全部ヨーロッパの5大リーグの選手であります。

この前の日本戦とスペイン戦にも23人登録メンバーがいました。23人登録メンバーを発表して14人がフランスリーグの選手でした。ということはどういうことかといいますと、ボスマン判決以降、フランスリーグの選手がこれだけ多くなったのは初めてということになります。だから日本に負けちゃったんですかね？だからスペインと引き分けられたんですかね？ということもあるかもしれませんが、14人フランスリーグの選手がいたということになります。

ビッグクラブの実現可能性ということについてですが、銀行なんかを見ていてもわかると思うんですけど、フランスは基本的に国の産業をどんどん合併させていって、強い会社を作っていくということを国策としてやっています。フランスだけじゃないと思いますけど、外国はやっています。ですから、第一勧銀と富士銀行と興銀を合併させてみずほ銀行を作ったり、三井と住友を合併させて三井住友を作ったり、新日鉄と住金を合併して新日鉄住金を作ったりということで合併するわけです。チームが合併することはなかなかないと思いますが、実際フランスにおいてビッグクラブとなりうるチームは3つあります。リヨンとマルセイユとパリ・サンジェルマンです。フランスで一番大きな都市はパリ、その次はリヨン、その次はマルセイユなので、都市の規模も大きな3つです。

それから、フランスというのは変わったところでありまして、いわゆるダービーマッチという、1つの市にプロチームが2つあるケースっていうのが、まずないんですね。20年以上前にパリに2つあったんですけど、今はないです。リヨンで2番目に強いチームはどこかという、4部リーグか5部リーグなんです。そして、マルセイユで2番目に強いチームはどこと聞くと、これも4部リーグくらいということで、プロチームがないんですね。

パリで2番目に強いチームという、パリ郊外まで含めると2部リーグにあることはあるんですけど、ないということで、大都市に1チームしかチームを作らないわけです。ここは、イングランドみたいにロンドンにプロチームが10いくつもあるというのとは違うというわけです。

この3チームから何人の代表選手が選ばれているかということを見ていくと、この前の日本戦、スペイン戦のメンバーのうち5人がパリ・サンジェルマンの選手でした。1チームから5人の代表に入

48

7-3. パリサンジェルマンにビッグクラブの期待

過去30年間のフランス代表で5人以上の選手が選出されているのは
 1980年代末から1990年代初めのマルセイユ(ベルナルド・タビ時代)
 1990年代半ばのパリサンジェルマン(八百長疑惑によりマルセイユが没落)
 2000年代半ばのリヨン(リーグ史上最多の7連覇)だけ
 10月の連戦での5人の選出はカタール資本によるビッグクラブ効果

大会名	成績	フランス	マルセイユ	リヨン	パリサンジェルマン
1992 欧州選手権	グループリーグ敗退	18	3	2	0
1996 欧州選手権	ベスト4	18	0	0	6
1996 ワールドカップ	優勝	10	2	0	1
2000 欧州選手権	優勝	8	1	0	1
2002 ワールドカップ	グループリーグ敗退	6	1	1	0
2004 欧州選手権	ベスト8	8	2	2	0
2006 ワールドカップ	準優勝	11	2	5	2
2008 欧州選手権	グループリーグ敗退	10	2	7	0
2010 ワールドカップ	グループリーグ敗退	11	2	4	0
2012 欧州選手権	ベスト8	12	3	2	1
2012 10 日本-スペイン戦	1分1取	14	2	2	6

るっていうことは、スペインとかの感覚から行くと当たり前だよなということなんですけど、フランスの感覚からいくと結構珍しいこととして、過去 30 年間で 3 回しかないです。1 回目は 1980 年代末から 1990 年代初めにかけてのマルセイユです。マラドーナを獲得しようとしていて、チャンピオンズリーグで優勝した時のマルセイユです。このときは、最多で 8 人くらいフランス代表に入っていました。それから、1990 年代半ばのパリ・サンジェルマン。1996 年のユーロのときなんですけども、このときは何が起こったかという、マルセイユが八百長事件で 2 部に落とされてしまったということで、マルセイユにいた選手が 5 人、パリ・サンジェルマンに集まったというわけです。96 年、パリ・サンジェルマンはカップウィナーズカップで優勝しています。フランスのチームで唯一タイトルを獲得しています。マルセイユは八百長問題でタイトルを剥奪されていますので、そうなるとう唯一のタイトルということになります。ヨーロッパカップは 130 回くらいやってると思うんですけど、フランスのチームが優勝したのは 1 回しかないんですね。2 回のうち 1 回が剥奪という形になってます。それから、2000 年代のリヨンですね。これは 2000 年代にリーグ史上最多の 7 連覇をしています。これは巨人の 9 連覇には劣るんですけど、7 連覇をしているチームというのは、スペインやイングランドやドイツにはありません。ヨーロッパで 7 連覇以上したチームは、スコットランドのレンジャーズが 9 連覇しているのが最多で、ヨーロッパの 5 大リーグで 7 連覇をしたチームというのはリヨンしかありません。しかもこの 2000 年に入ってからです。ということで、去年もパリ・サンジェルマンからは 5 人選出されたんですけど、この伏線として、去年パリ・サンジェルマンはカタールの資本によってビッグクラブという形で買収されました。去年はアルゼンチン代表のハビエル・パストレを獲って、今年はズラタン・イブラヒモビッチを獲ったんですけど、去年の移籍にかかわる金額が 100 億円、今年の夏の移籍にかかわるお金は 150 億円というとんでもない金額で選手を集めているということで、ビッグクラブの気があるといえます。もしも 1 年か 2 年早くオランダが大統領になっていたら、カタールの資本がパリ・サンジェルマンに入ったかどうかはかなり疑わしいです。そんなこともありまして、パリ・サンジェルマンが期待できるのかな、ということです。

ちなみに、今の大統領がオランダ、その前の大統領がサルコジ、その前の大統領がシラクですが、なんとこの 3 人とも、鼻風のサッカーチームはどこですかという質問には、パリ・サンジェルマンと答えています。これは、シラクはパリ市長をやっていたし、サルコジはパリの近郊の出身なんでパリ・サンジェルマンと答えるのはわかるんですけど、オランダはルーアン大聖堂のあるルーアンというところの出身で、彼は FC ルーアンという、今は 2 部と 3 部の間にいるチームが好きなんだけど、1 部ではパリ・サンジェルマンが好きと言っているわけですね。今チャンピオンズリーグでも、パリ・サンジェルマンは 2 勝 1 敗ということなので、久しぶりに期待できるかなと思っています。サルコジの時の遺産が少し残っているのかなという感じです。

他の競技の状況も少しお話しておきますと、ラグビーはナショナルチームも強いし、クラブチームも強いというスポーツです。去年ワールドカップで準優勝ですけど、最新の世界ランキングでは 5 位なんですね。クラブチームは、チャンピオンズリーグに相当するハイネケンカップというのを 17 回やっているんですけど、フランスのチームの優勝は 5 回、準優勝は 9 回となっています。それからハンドボールは、ナショナルチームはめちゃくちゃ強いです。今回のロンドンオリンピックも優勝はフランスでした。オリンピック優勝 2 回、世界選手権優勝 4 回という圧倒的な強さを誇っているんですが、クラブチームは全然ダメなんですね。2003 年に 1 回モンペリエが優勝しただけです。モンペリエは今年八百長を起こして、チームは解散に近い状態になってしまうと思います。それからバレーボールは、ナショナルチームは全然ダメですけど、4 年前のオリンピックでは確か日本と戦いました。クラブチームはそこそこ上手くいって、ずっと旧ソ連勢がバレーボールは強いのと、最近ではイタリア勢が 3 分の 2 くらい優勝しているんですけども、フランス勢も 2000 年代に入ってからはパリ・バレーというチームと、トゥールが 2 回優勝していて、なかなか健闘してます。それからバスケットボールは、今年ロンドンオリンピックでベスト 8 まで行きましたが、圧倒的に強いのはイタリアとスペインと

ギリシャです。イタリア、スペイン、ギリシャ勢が圧倒的に強くて、フランス勢は1回だけ、1993年にリモージュというチームが優勝しています。このときリモージュが優勝したのは3月か4月で、このときの5月にマルセイユがミランにミュンヘンで勝って優勝したんですけど、フランス初の団体球技における欧州チャンピオンとなったということです。

こうやって他のスポーツと比べてみると、ナショナルチームの世界ランキング的に見るとフランスのサッカーは、ハンドボール、ラグビー、バスケットボールの次の4番目くらいのスポーツなんですね。ラグビー、ハンドボール、サッカー、バレーボール、バスケットボールというのは、ヨーロッパで5大球技といわれるんですけど、サッカーはフランスでは4番目です。このようにほかの球技と比較してみると、ナショナルチームも火事場の馬鹿力的にワールドカップやユーロでも優勝することもあるし、クラブチームについてみると他のスポーツ並みに全然ヨーロッパで勝てていないということなので、何とかこの状況が変わる日が来るんじゃないかなと思っています。サルコジ時代の遺産というか、彼の言っていたことが実現できたのは、彼が辞めてからだということです。

私の方からは以上になります。ご清聴ありがとうございました。

II. ディスカッション

1. フランス代表の戦績とレキップ（フランス・フットボール）誌の顛末

田村：代表に関して言えば、ドメネクの時代とシンクロしてしまったっていうのがサルコジとしては大きいですね。2006年はたまたまジダンたちが戻ってきてうまくいったけれども、その幻想に引っぱられて4年間ズルズルいっちゃったじゃないですか。ドメネクの言葉に翻弄されたような部分もあって。そこがもう、サルコジの時代と完全にシンクロしてしまったっていうのはありますよね。

井上：そうですね、サルコジの責任ではないと思います。もう一つ言っときますと、2010年のワールドカップが終わってから、フランス代表ってほとんど負けてないんですよ。

田村：ブランの時代になってからですね。

井上：ええ、ですが地上波で伝えているときだけ負けるっていうところがあるので、日本の人にはフランスのサッカーはダメだと思われがちです。2006年とか1998年には準優勝なり優勝なりしたんですけど、全然それまでガタガタのチームだったのが、本大会で波に乗っちゃって優勝っていう感じでしたよね。優勝候補でそのまま優勝できたのは2000年のユーロくらいですよ。だから、イメージと実態っていうのはずいぶんかけ離れているとは思いますが。

田村：オランダとサルコジの話なんですけど、結局フランス・フットボールの編集長の首が飛んだっていうのは、私の親友がきっかけなんですね。フランス・フットボールとレキップっていうのは同じ会社で、前は独立で並んでたのが、フランス・フットボールの部数が少なくなって、今は単体では売ってないんですね。新聞のおまけになっちゃったんですよ。縦の関係になっちゃったんですね。そのきっかけになったのが編集長の首が飛んだ事件なんですけど、フランス・フットボールの編集長っていうのは、どっちかっていったら独裁者的な人で、「地獄の黙示録」のカーツ大佐みたいな人なんですけど、レキップ社内にある意味独立王国みたいなものを作っていて、思想的には左なんですね。つまりオランダを支持しているわけです。そのためフランス・フットボールはオランダのインタビューを単体でやったわけですね。それは政治のインタビューではなくて純粋にスポーツのイ

インタビューだったんですけど、社則として政治には関わらないというのがありました。僕の友人のザヴィエ・バレという人が編集部員なんですけど、彼と編集長の関係はもともと微妙だったんですけど、彼が編集長の方に言わずにレキップの方のトップに直接言ったんですね。それでレキップの方が問題にして、最終的に編集長を首にしちゃったんです。インタビューの方はどうなったかというところ、フランス・フットボールの方でもサルコジにもインタビューを行って、順番を付けて両方載せるという風にして解決して、それがさらに発展してレキップの方でも大々的にやるに至りました。選挙絡みがきっかけとなってレキップ社内に激変があったということなんですよ。それがいまだに尾を引いてる部分というのはあるんですけどね。

井上：ありがとうございます。

2. 「クォータ制」の背景—フランス代表と国籍問題

参加者：「クォータ制」の「クォータ」とはどういう意味ですか？

井上：ラテン語で「割り当て」ということで割合の意味です。男子何人女子何人というようなものです。「4分の1」という意味ではないです。有色人種とか両親が移民であるなど、他の国の代表選手になる可能性がある選手を何割以内にするということです。

参加者：外人枠を何人にするというのと一緒ですね。

井上：そうですね。まさに外人枠です。結構深刻な問題ですよ。当時はゴンサロ・イグアインをフランス代表にできなかったという問題があったので。今レアル・マドリッドにいるイグアインをフランス代表に入れようとして失敗したので。

田村：2001年のトリニダード・トバゴであったU-17でフランスは優勝しているんですけど、あの時日本も出ていて、菊池直哉とか駒野とか矢野貴章とかいたチームでフランスに1-5で粉砕されているんですけど、そのフランス代表っていうのが圧倒的に強くて期待された世代だったんですけど、結局A代表までいったのがシナマ=ポンゴルという黒人の選手だけで、アントニー・ル・タレックと2人がエースだったんですけど、他はみんな、ムーラ・メグニはアルジェリアの代表になっちゃって、カウキ・ベンサーダはチュニジア代表になってしまいました。フランス代表になれないからみんな帰化して代表になっちゃったんですよ。そういうことがこの辺から起こり出しているんですよ。

井上：ええ、だからジダンっていうのは本当に例外中の例外なんですよ。

田村：ジダンの両親はアルジェリア人だけど山岳民族出身で、普通のアルジェリア人とはちょっと違うんですよ。

参加者：フランス代表になれないというニュアンスで違うということもあるんですか？

井上：それもそうです。日本でもわかると思うんですけど、21歳や22歳の選手がいきなり代表入って難しいですよ。監督もやはりある程度実績を積んだ選手を代表に入れたいですから、そうなってくると若い選手はどうしても入れないわけですね。そのときによその国の代表になれるんだっ

たら、今アフリカとかはナショナルチームに力入れていますから、代表になりますよね。それはどこもそうだと思うんですけど、フランスの場合それが特に顕著だということですね。しかも、育成がしっかりしているとフランスは思い込んでいるからこそ、たまたまいなくなっちゃったんじゃないかと、一生懸命手塩にかけて、クレールフォンテーヌで試験に受かって、ずっと英才教育を受けてきた人間がいなくなってしまうということですね。

あと選挙戦のときに一つ問題になったことなんですけど、今年はオリンピックの年でしたよね。日本のオリンピックの旗手ってどなただったか覚えていますか？レスリングの吉田沙保里ですよ。フランスのオリンピックの旗手は、この選挙の時に誰にしようとしたかという、トニー・パーカーにしようとしていたんですよ。NBAのサンアントニオ・スパーズの選手ですね。日本でいったらイチローみたいな人ですね。イチローと大体かぶると思います。今回野球はありませんけど、イチローが旗手になることに普通はみなさん反対しませんよね。ところがパーカーは猛反対を受けたんですね。なんで猛反対を受けたのか？彼はアメリカに住んでいて税金を払っていないから。そういう国なんです、あの国は。そういう国なんで、パーカーは旗手になれなかったんですね。ですから、今回の旗手は女子のフェンシングでアトランタの金メダリストのローラ・フレッセル＝コロビがなったんですね。フランスのフェンシングはダメだったんですけども。日本とは、政治に関する意識とか税金に対する考え方の違う国だなと思いますね。トニー・パーカーに対しては、オランダはネガティブだったんですね。サルコジは何でパーカーにやらせないんだということを言っていたんですね。

参加者：そもそもなんですけど、フランス人って団体競技にそんなに興味あるんですか？個人の競技は柔道とか強くなっているのはわかりますけど。

井上：いやいや、フランスは圧倒的に団体競技の方が強いです。

参加者：強いんですけど興味を皆さん持つんですか？

井上：スポーツって元々は非日常を求めるものなんで、個人主義の人間が団体で何かをやることにフランスはすごい関心を持つわけですよ。非日常だから。だから個人種目でのフランスはあまりメダルを取ってないんですね。

参加者：じゃあ柔道くらいなんですね。

井上：柔道は競技人口が違いますから・・・

田村：自転車とかテニス、フェンシング、水泳なんかも最近は強いんですね。

参加者：ビッグクラブを望むというのがありましたよね。首都のパリではそうかもしれませんが、フランス人全体はそうなのかなあって素朴な疑問がわいたんですけど。

井上：フランス人についてよく言われるのは、「心は左でも財布は右」っていうことなんです。人間のずるいところは、相手に対してはこういう環境であるべきと望んでも、自分自身はこういう環境にいたくないということです。日本人もそうだと思うんですけど。自分自身は成果主義は嫌だ。けども、トップのプロ選手は成果主義であってほしいということですよ。これはフランス人というより一般的に言えるんじゃないですかね。

参加者：クォータ制っていうのも、旧宗主国の定めじゃないけど、還元するのはもう OK だろとか、それに諸手を挙げて反対するとかえって叩かれるのではないかという感じはしないこともないですけどね。

田村：それでローラン・ブランが発言を誤解されて、すごい叩かれたことがあるんですよ。彼は今の育成に対してこのままじゃダメだということを言って、それがこのクォータ制を支持したというか、人種差別的にとられて相当叩かれたんですね。

井上：だからクォータ制のデメリットの一つは、人種差別につながるわけなんですよ。

3. フランスにおける「育成」と「移民」の問題

参加者：もっと寛容な国でね、育ったけれども、じゃあ母国に帰りなという形でね、みんながそういう風にチュニジアで頑張れとか思ってるのかなあとと思ったら、そうでもないという感じですね。

田村：2002年のワールドカップでセネガルに負けたじゃないですか。あの時のセネガルの選手が全員フランスで育成された選手だったから、あれは結構ショックだったんですよ。

井上：それはだから、日本の産業界が直面しているのと同じことなんですよ。日本の産業界が育てた人材が、中国や韓国の会社にみんなスカウトされていなくなってしまうことと同じですよ。

参加者：いま日本も問題になってるじゃないですか。ユースの年代から直接ヨーロッパのクラブに行ってしまった場合、日本に帰ってきて3年間クラブと契約できなくするとか。実際韓国では、今年はJリーグのチームにユースから直接、韓国のチームを経ないで行っちゃった場合、帰ってきて5年間国内でプレーできないとかがあって、フランスだけの問題じゃないなという感じがしました。

井上：そうですね、フランスだけの問題じゃないと思います。セネガルにワールドカップで負けたときの話とか、ジダンの話とかがそうですね。ジダンがもしフランスにいなかったら、たぶんフランスのサッカーの歴史は大きく変わっているわけなんですよ。ジダンがもしアルジェリアに行っていたら、アルジェリア代表に多少うまい選手が育っているわけですよ。

田村：先ほどおっしゃられたように、ジダンってフランス的な教育を受けていたわけですよ。それがイメージというか現実問題として、たとえばナスリやベンアルファが問題を起こすじゃないですか。彼らだって移民の子弟だし、郊外の出身です。要するに、2000年代の途中に、郊外の団地に住んでいる荒れた若者たちによる暴動がありました。そういう世代を代表するような、そういう環境で育ってきたわけですよ。実際今回のユーロでも彼らのような存在がチームの輪を乱したわけじゃないですか。あれはチームの反乱というよりは個人的な反乱、個人の問題だったわけで、そういう風にイメージがシンクロしてしまうわけですよ。

中塚：イメージっていうと、あのジダンもラストのラスト、2006年のヘッドバットがあったじゃないですか。ですので、やっぱり移民に対する偏見を増幅してしまうようなところがあるのかなあと思いますが。

井上：それは大きくあると思います。失業率が高くなってきているときというのは、移民が仕事を奪うから若者の失業が増えてしまっている、というときなんですね。日本人はこの辺りはまだ感知していないんですけど、日本にだって外国人の優秀な人材がどんどん入ってきますから、日本人のポストがなくて、私なんかも大学で教えていますけど、日本の大学生は外国の大学生に勝てないです。もう大相撲がそうなっちゃっているんですよ。大相撲はモンゴル人ばかりになってしまっています。こう言っただけなんですけど、モンゴルってそんなにスポーツの強い国ではないですよ。モンゴル相撲は強いんですけど、あまりワールドカップとかでも聞いたことがないですよ。そういうことで、移民が職を奪うっていうことに対する不満っていうのがあって、荒れる国を2005年くらいに作っちゃったんですね。サルコジが大統領になったら移民選手が全部なくなってしまって、弱くなってしまわないかと言っていた人もいたわけですよ。結局テュラムがあれだけ言ったにもかかわらず、サルコジが大統領になって移民排斥するじゃないですか。しかしサルコジは、移民だろうがなんだろうが力のある奴は取るということを大統領時代きちんと言っているわけですよ。さっきの新聞記事じゃないですけど、オランダは、外国の資本がフランスリーグの放映権を獲得するときに、これはフランスの文化だから外資を入れないぞっていう風に規制したいと言っている。サルコジはそうじゃなくて、高い金払ってくれるならカタール人だって何だっていいじゃないかということで、今考えてみると、彼はすごく市場主義の人間だったわけですよ。市場主義の人間であるにもかかわらず、市場主義の一つの形のクラブのサッカーでトップを獲れなかったわけですが、彼のまいた種が近い将来、花開くかもしれません。リオンはリオンでそれなりに金を持っていますし、マルセイユはどうかなといった感じなんですけど、少なくともパリ・サンジェルマンに関してはヨーロッパ有数のサッカークラブになる可能性はあると思います。また来年もあのチームは大物を獲るのではないかと話題になっているところです。巨人が10何年前、4番バッターばかり集めて、いったいあのチームは何をやっているんだということがあったんですけど、4番バッターばかり集めたときはダメだったんですね。でもその数年後、たくさん集まった4番バッターの中で生き残ったのが1人か2人いて、若手が伸びてくるということがあるので、そういうモデルっていうのが今後は期待されるんじゃないかなという風に思います。

田村：あとプラティニですよ。プラティニの考え方はどちらかと言ったらオランダの方に近いじゃないですか。

井上：プラティニはオランダ好きなんです。プラティニ本人は移民であるにもかかわらず、オランダに近いですよ。プラティニはもともとミッテランとすごく仲が良く、オランダはミッテランの秘書をやっていたんですよ。ですから、オランダはミッテランの影響を非常に受けている人間で、そういった意味でいくと社会党のいわゆる王道を歩いている人間です。プラティニっていうのはああいう人間なんですけど、そういう点で見るとすごく社会主義的な考え方をもっている人間で、平等にしていこうとか公平にしていこうとかと考えているような人間です。ユーロを今後一国開催じゃなくて、いろいろなところで開催していこうなんていうのはプラティニらしいなと私は思います。

4. フランスにおける「みるスポーツ」環境と EURO2016 の見通し

金子：フランスはスタジアムが老朽化しているらしいですが、観客もあまり入っていないんですか？

井上：すごくいい質問だと思います。フランスでは、「する」スポーツとして環境を整える方が、ワールドカップやオリンピックをやるよりも重要であるという風に考えているわけです。つまり日本で

いうと、埼玉スタジアム 2002 とか横浜国際競技場といったワールドカップをやるようなスタジアムにお金をかけるよりは、筑波大学附属高校のグラウンドを芝生にしようということなんですよ。つまり、今年の1月に清水論さんがサロンでお話をしてくれたときも言っていたように、日本はスポーツ基本法みたいな形で、チャンピオンスポーツというよりはむしろ「するスポーツ」に力を入れているわけです。このためフランスのスタジアムは、少し老朽化してきているというわけです。日本では信じられないような話なんですけど、1998年のワールドカップをやるって決まった時に、フランスの都市で開催を嫌がったところがありました。何でかと言うと、たかだか4試合か5試合のサッカーに金かけるよりも、むしろその町の人がスポーツをやれるようなプールを作るとか、グラウンドを10面作るとか、テニスコートを100面作ることが重要なわけで、断っている経緯があります。そういうお国柄なんですね。

参加者：4年後のユーロはどうなるんですか？

井上：4年後のユーロに向けてはそれなりにできていると思います。去年の11月のサロンで話をしたんですけど、フランスにとって転機だったのは、ラグビーのワールドカップで成功したことなんです。サッカーのワールドカップよりも大きな成功をラグビーのワールドカップでしたので、スポーツイベントって儲かるんだとか、スポーツイベントって見栄を張らなきゃいけないんだなことが、フランス人にはわかったみたいですね。ですから、パルク・デ・フランスなんかも相当長い期間にわたって改修を今はじめようとしていますし、ユーロに向けてスタジアムを改修しようという動きは今あります。

5. 税金をめぐって

参加者：オランダの所得税75%の猶予期間ってどれくらいですか？来年とかの話ですか？

井上：とりあえず2012年と2013年の2年間だけの適応です。実はこれどういうことが起こっているかという、フランスの金持ちはどんどんいなくなってます。有名なのが、ルイ・ヴィトンの社長がいなくなったっていうのが結構日本でも話題になりましたよね。ルイ・ヴィトンの社長はベルギーに行ってしまいました。私の勘違いでなければ、ヨーロッパのサッカー選手は確かみんなモナコに住民票を移していると思うんですけど、だからあまりみんな直接は関係ないと思うんですよね。

参加者：モナコ公国ってフランスに対して税金払うんですか？

井上：いや、モナコ公国に対して税金を払います。

参加者：外交権と軍事権だけフランスにある。

井上：そうですね。外交権と軍事権とサッカーだけフランスにあります。

参加者：じゃあモナコに住んだら75%の税金は取られないんですね。

井上：そうですね。ちなみに、ヨーロッパのほかの国の税制を調べてみたんですけど、最高でも40%ですよ。北欧はちょっと別なんですけど、いわゆる大陸系の国ですとそんな感じですし、北欧の方は社会福祉の制度が違いますから、単純に比較はできないんですけど。まあ75%っていうのはち

よっと考えられない数字ですね。1億円ですからね。1億円ってすごい大金なんでしょうけど、パリ・サンジェルマンには22人1億円のプレイヤーがいるらしいですしね。巨人にも10人くらいいるのかな？ プロ野球も10人くらいいますよね。もっといますかね？ そういう金額なんで、すごくこれは衝撃的ですよ。

6. その他

牛木：サルコジ時代とかオランダ時代といったときの政策、特に経済政策が、代表チームの成績、あるいはクラブチームの成績に影響したという因果関係のプロセスがあんまりよく理解できません。特に代表チームについてはどんな関係があるのかなと思ったんですけど・・・。

井上：代表チームには全く関係ないと思いますよ。

牛木：そうすると代表チームの話は要らないんじゃないですか？

井上：要らないです。逆に言うと、日本の人にとって、ワールドカップとか欧州選手権っていうのはすごく位の高いイベントですので、チャンピオンズリーグも最近人気が出てきましたけども、4年に1回で、特にワールドカップは日本も参加するイベントですから、そういうわけで一応入れました。

参加者：ラグビーのワールドカップのことなんですけど、サッカーのワールドカップの大会期間よりも倍長いんですね。ヨーロッパではラグビーもものすごく盛んですので、ラグビーのワールドカップが成功したのは、サッカーのワールドカップよりも多くの観戦客がヨーロッパ中から来るためだといえると思います。要するに、お金がフランスに落ちてるから、結果として成功しているということで、それが他のイベントに通じるかは、また別の問題だと思いますけど。ツール・ド・フランスも長いですから。

井上：人の移動があったという点でいくと、ラグビーのワールドカップってサッカーのワールドカップの比ではなかったです。近くの国がたくさん出ていて、人気があるというのがあるんですけど、イベントとしてどちらが大規模になったかという点、ナショナルレベルの大会になるとラグビーの方ですよ。

参加者：選挙とサッカーで面白かったのは、ワールドカップの決勝戦と参議院選挙が重なった時があって、74年に至っては日本で初めてワールドカップの決勝戦の生放送をやったんですけど、全部の放送局が選挙速報をやっている中、テレビ東京だけがワールドカップをやっているということがありました。あとフランス大会の決勝の7月12日も参議院選挙だったし、2010年も参議院選挙でした。そういう意味では、こういう切り口で日本の選挙とワールドカップの関係を調べたら、研究の材料になるのかなあと少し思ったんですけど。

井上：日本のスポーツイベントで選挙と関係あるのって、競馬くらいですよ。中央競馬って選挙のあるとき出走時間をずらしたりしているんですよ。

参加者：時間的にサッカーのワールドカップは時差があるので、選挙とはあまり関係ないですけど。

井上：ワールドカップは何年も前から決勝戦やる日が決まっていますからね。選挙は日本の場合水物ですからね。

参加者：クォータ制について、文化功労章に選ばれた岡野さんの話で、82年のワールドカップでワールドカップ史上初のPK戦をやった西ドイツとフランスの試合で、終わった後に岡野さんが、なんでティガナやトレゾールに蹴らせなかったんだ、と言っていたのを今急に思い出しました。

井上：あれは、そのときミッシェル・イダルゴという監督が、黒人選手に蹴らせて失敗したら、自分の命が危ないという風に本当に思ったというんですね。たかだか30年前に、黒人はそういう立場にあったということです。マリウス・トレゾールは当時、フランス代表で初の黒人のキャプテンになったんですけどね。そのPKのトラウマっていうのはずっと続いて、フランス代表はPKをその後も黒人選手に蹴らせていなかったんですよ、一回も。1998年のベスト8のイタリア戦で、ティエリー・アンリが蹴ったのが黒人として初めてで、それまでずっと試合中のPKも黒人にはずっと蹴らせていなかったんですね。

田村：黒人選手自体は古いんですけどね、フランスでは。代表入ったのも1920年代にはもういましたから。

井上：そうですね。移民の中でも黒人は、色が白いから、黒いからという形でスポットを浴びるかもしれないけど、もともとフランスのサッカーの歴史って移民の歴史で、1958年に有名なペレが世界にデビューして、フランスが準決勝でチンチンにされたんですけど、あの時のフランス代表は「〇〇スキー」ばかりなんですよ。要は東欧の選手ばかりですね。ポーランドの移民が戦後の復興のためにフランスに来て、その移民の子供たちが皆サッカーをやったという風になっていたわけです。だからその時のチームは、アルベール・バトーという有名な監督がやっていたんですけど、スタッド・ランスといったベルギー寄りのチームの選手ばかりだったんですね。プラティニはご存じの通りイタリアの移民ですし、ジダンの両親もご存じの通りだし、最近ではアフリカ系よりもむしろカリブ海系の身体能力の優れた選手も集まっています。フランスの場合は、今カリブの話をしましたけど、ニューカレドニア出身もいますし、レユニオン出身もいて、世界中のかつての植民地からの人材が集まっているということが、私はフランスの財産だと思いますし、決して私はフランスはパンとグルメだけの国じゃないと思っています。世界からそうやって人が集まってきたところだと思っています。フランスに皆さんが関心を持っていただけてすごく私としてはうれしく思っています。今日はお話ができよかったです。

中塚：かつての植民地からフランスに移ってきた人たちっていうのは、基本的に二重国籍になるわけですか？

井上：日本とは国籍に対する考え方が違っていて、国籍は選べるという形になっています。私たちもたぶん、子供のころフランスに移り住んで、20歳になったときに「私はフランス人です」と言ったらフランス人になれると思います。ですからパスポートを2つ持っている人も多いです。また、おじいちゃんおばあちゃんが4人ともフランス人という人は全体の4割とよくいわれているのですが、それはフランスが、アフリカやカリブ海とかからだけでなく、スイスとかドイツとかイタリアとかそういう近隣の国も含めて、異文化、違う国のナショナルティの選手が集まっている国であることを示していると思います。

牛木：この記録を文章にして公表するとき気を付けてもらいたいんですけど、黒人という言葉が出ましたが、色が黒いから全部黒人と言っていいのかということです。例えばアフリカ系でもイスラム系のアラブ人の多いところの人は黒人というべきではないかもしれない。日本語で「黒人」というと、南の方の「ブラック・アフリカン」ということを言っているので、先ほど出たジダンを黒人と言っていいのかということを知るとき気を付けてもらいたいと思います。

参加者：それと海外県のクレオールの人と、アフリカの黒人は違う。そういうのをフランスでは微妙に分けているから。40年前はほとんど海外県はクレオールだったから、今とはちょっと違うよね。海外県のクレオールはフランス人って感じだったからね。

井上：海外県はもともとフランスの領土ですからね。

参加者：PTTとか警察官といった公務員で、マルティニークとかグアルドルーブの連中が結構おりますのでね、そこが違いますよね。一般的にはそういうところいらないですからね。

中塚：すごく今日は頭の体操になって、ためになったなと思うんですけど、政治の絡みで言うと、「フランス人って誰なの？」っていう話とか、「サッカーにおける国籍ってこれからどうなっていくの？」とかそういう話にもつながってきそうな、いい話題を提供していただけたかなと思います。最初にも話がありましたが、ここはある意味テストマッチの場であって、この2週間後に本戦が控えているので、撃沈されないように（笑）。またその様子も是非報告していただけたらなと思います。どうも、ありがとうございました。

以上。続きは「ルン」にて…